

協力するための技能を学ぶ学級指導の開発 —ソーシャルスキルトレーニングを用いて—

安藤 智英美

東京都板橋区立桜川小学校

平成19年度、特別支援教育が本格的に実施されることとなった。特殊教育から特別支援教育への移行により個々の特性に応じて指導する専門分野で蓄積された教育実践が通常の学級に紹介される機会が増えた。特別支援教育の視点は、通常学級の教師が学級環境の整備をする際や学習のつまずきに対してより焦点化された気づきをもたらすなどさまざまな点で指導改善に役立っているといえる。本研究は、特別支援教育で実践されているソーシャルスキル指導を応用して通常の学級の学級活動の授業で「協力」を指導する場合の効果と課題について考察を加えたものである。特に、学年に応じたアレンジを加えることにより学級集団の成長と指導についての検討を加える。

キーワード：協力、ソーシャルスキル、振り返り、学級活動、通常の学級

1. 問題と目的

1.1. 「協力」するための技能を示す必要性

相手の行動や発言に耳を傾けようとしな。また、自分の一方的な意見を言ったら満足してしまう。個人的には穏やかで理解力のある児童にもかかわらず、小さな意見の対立で不安定になってしまう。通常の学級の子どもたちは人間関係でのトラブルがつかない。ソーシャルスキルのレパトリーが少ない子どもとは特定の子どものことを指すのでは無く、通常の学級に在籍する全ての児童に共通する課題である。

「協力」して活動するというソーシャルスキルもまた、学校が子どもたちに身につけてほしいと考えているスキルのひとつである。「協力」とは、互いに助け合うこと自体を達成すべき目標とし、他の人を潜在的な協力者として認め、なるべく競争や個別の代わりに協力して作業することを奨励することを意味する。小学校では「協力」のスキルをどのように子どもたちに指導しているのだろうか。

まず、特別活動がある。当番活動の場合、グループの利点を活かして清掃しているとはいいがたい姿やただただ時間をやり過ごせばよいという気の入らない活動ぶりを指導する際、学級担任は箸やちりとりを持って立っている子どもたちを前にして「協力しなさい。」「リーダーは指示を出してください。」などと指導する。し

かし、このような指導では子どもたちに変化は無い。話し合い活動をして子どもたちに解決をさせたいと考えたとしても「協力」という抽象的な概念の必要性を理解させ実践させることは難しい。

「協力」についての指導の場は、「協力」を題材とした道徳授業にもある。茨城県教育委員会の道徳教育のページ¹⁾には、友だちを理解し協力し合って楽しい学級を作ろうとする心情を育てる指導事例が紹介されている。道徳の指導では、資料を読み、「協力」して作業することの意義を心情的に理解させたり、「進んで協力しよう」とか「協力することはすばらしい」という価値を見いだしたりすることをねらいとした実践が多く見られる。道徳の授業には、子どもたちが「協力」の意義を心情的に理解できるという効果がある。しかし、道徳の授業は、仲間で「協力」してみたいと思った児童や、互いに助け合う学級の風土や社会をつくりたいと考えた生徒に、具体的にどうしたら「協力」が達成できるのかという技能を教えているわけではない。

自分が協力することを前提として相手に協力させるよう工夫することをテーマにした道徳の授業を実践したのは藤木(2008)²⁾である。小学校6年生に交渉や説得の技能を習得させつつ、どのようにすれば相手に協力させることができるかを考えさせ社会的ジレンマを解消する態度を育てようとした。交渉や説得といった「協力」を促すための技能は、教科内容から離れて社会的ジレンマの解決に使えるスキルである。「協力」に必要なスキルは社会的ジレンマを解決するために必要となる交渉や説得などの高度なスキルの他にもあるのではないか。「協力」に必要なスキルを習得させ、学校生活

Chiemi ANDO : Developing the Classroom Activities for Training of Team Building -Applying Social Skills Training for Special Needs Education-
Regular Class Teacher at Sakuragawa Elementary School

で使えるようにするにはどうすればよいのだろうか。

1.2. ソーシャルスキルの指導に関する先行研究

ソーシャルスキルの指導とは、「良好な対人関係を発展させたり、あるいは対人関係のつまずきを改善させたりすることによって、子どもたちの心理的健康や社会的適応の促進・改善をめざした心理社会的な指導・治療方法である。」(佐藤・佐藤 2006)³とされる。近年は特別支援教育の発展に伴い、東京都の情緒障害等通級指導学級などで通級指導が必要な児童に少人数のグループに対して実践をされる機会が拡大してきている。

通級指導教室におけるソーシャルスキルの指導は、子どもの発達や障害特性に応じて発達の促進や適応を目指した実践になっている。社会的スキルには7つの領域(社会的参加、情緒的理解、向社会的行動、自己コントロール、コミュニケーションスキル、フェアプレイスキル、社会的問題解決スキル)があるとされ、子どもたちに領域のねらいを通じて想定された困難な場面で自分の行動を変化させること可能にできるようトレーニングする。したがって、教師は子どもたちの実態を把握し、子どもたちに困難感を克服させるために必要と考えられる活動を多くの活動の中から選択することができるようになっている。実施に当たっては実践の場が通級指導教室による指導であることから2~10人程度の小集団で指導されることが多い。また、子ども3~10人のグループでは、2~4人の指導者を必要とし個別介入をする。以上のようなソーシャルスキルの治療的な活用の他に、通常の学級で「人づきあいの楽しみ方」を学ばせるための活用方法がある。

1.3. 通常の学級におけるソーシャルスキルの指導

2000年ごろから通常の学級でもソーシャルスキルの指導が実践されるようになった。小1プロブレムの解決策として、また、学級の荒れの解決策として学級活動の時間にソーシャルスキルの指導をする事例がみられる。

セカンドステップ⁴という1980年代にアメリカで開発された教育プログラムがある。セカンドステップは人の心や身体を傷つける以前に、自分の感情を自覚し、相手の気持ちを尊重して、言葉で建設的に問題を解決するソーシャルスキルを学ぶプログラムである。2006年NPO法人日本こどものための委員会によって日本に導入され、東京都品川区は教育委員会での導入を決め現在38校で通常の学級でセカンドステップを使った指導がされている。この場合の対象学年は低学年であった。

通級指導学級で実践されているソーシャルスキルの指導は個々の問題解決のために導入される場合が多い。しかし、通常の学級では問題が起こってから指導しているのでは遅い。深刻な問題が起きないような学級の状態

を築くために日頃から対策を講じることが最も重要である。そのために、通常の学級においてもソーシャルスキルの指導⁵が試みられている。しかし、その後ソーシャルスキルを通常の学級で行った実践事例はあまりみられない。学年の発達段階や学級の人間関係などをみて、学級担任が試行錯誤をしているのではないかと考えられる。

1.4. 教科・領域などでのソーシャルスキルの指導

通常の学級では、グループによる課題解決型の授業が特別活動や教科の学習の中で実践されている。

特別活動でグループによる課題達成の指導を研究している団体がある。日本学校GWT研究会⁶は、行動科学に基礎をおくラボラトリー・トレーニングの学習理論とアドラーをはじめとする成長心理学をベースにして子ども自らが気づいて行動変容していけるようなグループワークを実践している。

教科の授業を通して学級経営をし、生活指導をするという実践も興味深い。滝井(2001)⁷は、算数科において授業のやり方や問題づくりに工夫をしてクラスを育てる実践を提案している。クラスを育てる算数の授業のチェックポイント(滝井 2001、P59)がありクラスづくりに有効な算数の授業には『多様性』『独自性』などという別の視点からの評価もできる授業を取り入れるべきである。」とある。体育科等では、チームづくり、協力、公正などの態度を育てることが目標としてあげられている。授業時間の中で体育科のねらいを解決することになるので、「協力」のスキルを土台に、仲間と折り合いをつけるスキル(意見を交える、勝敗にこだわらない、妥協する、納得するなど)が必要となってくる。

通常の学級ではグループによる課題解決型の授業がさまざまな場面で実践されるが、教科のねらいを達成したり、課題を解決したりするために用いられているため、子どもたちの「協力」の有りようそのものを指導するというより、教科のねらいにどれだけ近づいたのか、または、課題がいかに解決されたかに力点が置かれる。教科の指導の場合、教師はまず児童の「課題の到達度」を評価しているからである。教科を指導しているときの教師はグループ活動をしていても、児童がどのように協力しているかをつぶさに受け取ることが難しいことを自覚していきたい。

通常の学級の担任は自身の反省も込めれば、子どもたちが課題に到達するまでの過程で何をどのように発信しているかを看取る視点が大きくなる場合が多いのではないだろうか。通常の学級の担任は「協力」の授業で子どもたちが相互に交流をする過程で何をどのように発信しているかを受け取り、児童理解につなげる努力をする必要があるのだろう。

1.5. 「協力」のための実践的なスキル

ソーシャルスキル (social skills) は、社会生活や対人関係を営む上で必要な技能全般を指すが、互いに助け合うこと自体を達成すべき目標とし、他の人を潜在的な協力者として認め、なるべく競争や個別の代わりに協力して作業することを奨励するためには具体的にどのようなスキルを身につけさせればよいのだろうか。例として以下のスキルが考えられる⁸。

- ・メンバーの動きに注目する。 ・ルールに従う。
- ・グループの流れに沿って動く。
- ・リーダーの役割をする。 ・役割を交代する。
- ・フォロアーの役割をする。 ・相づちをうつ。
- ・成功への見通しを共有する。 ・行動を調整する。
- ・失敗を受け入れる。 ・気持ちを切り替える。
- ・謝る。 ・注意を集中する。
- ・仲間を応援する。 ・感情、衝動性を制御する。
- ・かけ声に合わせて行動する。
- ・他者との注意や視点、目的を共有する。
- ・相手の動きに合わせる。 ・提案をする。
- ・他者の気持ちや考えを理解する。
- ・言葉でやりとりする。 ・助言を受け入れる。
- ・目で合図をする。 ・仲間の参加を促す。
- ・仲間の良さに気づく ・仲間に感謝をする。
- ・焦らないで待つ。 ・譲り合う。
- ・話しかけるとき相手の名前を呼ぶ。
- ・うまくいくようにユーモアを利用する。

人へのかかわり方を知っていても、「協力」をする際にはその場で何が行われているかを適切に理解し、その時の目的に応じて行動しなければ一方的になったり、場違いの行動になったりする。表現や動作といった非言語コミュニケーションも含めてグループ内で活発に情報が交わされるようにするためには、学習場面で学習者にどのような「協力」が求められているかが理解できていなければならない。授業では「協力」を学習している場面を分かりやすく示して「協力」に関する行動を引き出すことが大切である。また、児童が「協力」のスキルをどの程度使えるかに合わせて、身につけさせたい「協力」のスキルを組み合わせる指導をしたい。

1.6. 『学び合い』で育まれる「協力」のスキル

ここまで筆者は、「協力」するための実践的な技能を取り上げて通常の学級で指導する必要があると述べてきた。しかし、西川 (2012)⁹は、子どもたちは自然に『学び合う』存在であることを基盤にして授業の在り方そのものを根底から変えるべきであると主張している。

西川 (2012) によると、「学力向上も人間形成も全て

はクラス作りが基本で、クラス作りができれば、全部うまく、簡単に出来る」この「クラス作り」を学級活動や特別活動の時間ではなく、「教科学習」の時間にすることが最も有効であるとの考えに基づき、「教科学習の時間でクラス作りをするとしたならば、子どもたち同士の関わり時間を教科の時間において保障しなければならない」(p30)と記す。そして、授業の中で教師が主に負ってきた「説明」の部分について、「(略)説明が出来るのは、教師だけとは考えていません。多様な教育媒体を通して、既に知っている子どもが一定数以上はいると考えている」ことから、「そのような子どもたちを黙らせて座らせて、一人の教師が説明するという事はかなり効率が悪い」とする。

学級の中の「出来る子」に注目をして、クラスメイトのために説明のスキルを積極的に使わせようという考え方は部分的に授業に取り入れることは可能である。しかし『学び合い』はそのような『方法』のレベルのブレンド」(p 59)を否定する。『学び合い』は考えである」という言葉を理解するために、部分的な導入をしない方がよいと述べる。

西川の考え方の背景にある「従来の授業においては『出来る子』の授業への参加度が低い」の「出来る子」とは「学力が高く、かつ、説明のスキルが高い子」を指す。能力の高い児童・生徒に積極的に説明のスキルを使わせることによって流動性のある授業にする実践は興味深い。『学び合い』の活動の中に「協力」に関連するスキルが埋め込まれており、取り立ててスキルだけを取り出して『学び合い』を成立させるための方法を学ばせる必要はないとしている。

スキルを寄せ集めれば『学び合い』が成立するかといえば、そうではないだろう。西川の述べるように方法を集めても「考え方」に至る訳では無い。しかし、学習者が『学び合い』を通じて何を学んでいるかをつかませることによって自分の学びを強固にすることは必要である。『学び合い』を通じて、説明のスキルはもちろんであるが、交渉や説得、仲間を褒める、小さな声で話す、仲間の話をじっくり聞く、などなど学級の全ての児童にとって『学び合う』ために必要とされる具体的なスキルを教科の学習と同時に身につけているのだと気づくための学びの時間は、『学び合い』の質を向上させることにつながると考えられる。従って、現在教えている教科の内容とは関連させず「協力」するための技能にのみ焦点を当てた授業を実践することとする。児童が「協力」するための技能にだけ集中することが出来るようにすることで、「協力」に関する気づきを明確にもつことが可能となるであろう。

以上のことから、教科内容を離れ、児童と担任が「協力」するための技能そのものに焦点を当てて活動ができ

る授業をしたいと考えた。また、いくつかのスキルを組み合わせれば「協力」が可能になると考えるのでは無く、まず「協力」の楽しさを体感し、その後自分が使ったスキルを振り返ることができるようにしたい。

2. 方法

本研究では、学級活動の時間に集団で楽しみながら体験を振り返り、問題点に気づかせ、解決しようとするために必要なスキルを意図的に学ばせるために、ソーシャルスキルの一つである「協力」をターゲットにした活動を低学年用、中学年用、高学年用アレンジして指導する。その結果、子どもたちが「協力」についてどのように考えたか、また、教師が授業をどのように振り返ったのかを検討する。

2.1. 実験授業の概要

実施校：東京都内の公立小学校
 学年：小学校1年生（4学級）115名
 小学校3年生（2学級）78名
 教科：学級活動（特別活動）
 時数：1コマ（45分間）

2.2. 実験授業の方法

輪ゴムにタコ糸を4カ所結び、4人でタコ糸をひっぱり合わなければ置いてある紙コップを動かさないようにし、紙コップでタワーを作るグループ活動をする。さらに、子どものスキルの獲得や柔軟な対応力を養うために葛藤場面を設ける。子どもにとって少し困った場面を設定することは、子ども自身にどうすればよいかを考えさせたり、グループでより適切な行動を促したりするのではないかと考えられる。どのような葛藤場面を設定するかについては、学年によって難易度を考えて調節した。

実験授業の最後の5分間程度を振り返りシートへの記入時間とした。振り返りシートは5つの設問からできている。設問1~3は、「はい」と「いいえ」の2択の回答である。設問4と設問5は記述式とした。

1. 活動の面白さ
2. グループの人への注目
3. 協力できたかどうか
4. どうしたら協力できるか
5. よかったこと、気づいたこと

また、授業後に指導をした教師、または指導を参観した教師に簡単なアンケートに記入していただいた。

2.3. 小学校1年生の実験授業と考察

2012年9月12日に小学校1年生4クラスの実験授

業を実施した。授業はそれぞれの学級担任が実施したが、そのうち1学級の担任は安藤である。実験授業の流れを以下に示す（表1）。

表1 実験授業の流れ（小学校1年生）

過程	学習内容
導入 10分	○協力しよう。 ・協力したことがありますか？ ・協力ってどういうこと？ ■協力してコップタワーをつくる方法を知る
展開 25分	① ウォーミングアップ ・どうしたら協力できたかを考えながら作ろう。 ・うまく協力する方法がたくさんあることに気づこう。 ② 葛藤場面の設定 「話をしないでコップタワーをつくらう。」 ・児童全員分のマスクを用意する。会話をしない設定で、かみコップタワーをつくるように指示を出す。 ・会話ができるときの「協力」と会話ができないときの「協力」ではどこが違うだろうか。
振り返り	○協力について感じたことや気づいたことを振り返ろう

(1) 1年生児童の振り返りシートより

1年生児童115名中、101名（87.8%）の児童が授業を「面白かった」と答えた。グループの「他の児童の動きに注目」したのは89名（77.3%）、また、「協力」ができたと考えた児童が99名（86.0%）であった。

どうしたら協力できるかという児童の気づきについては以下の記述があった。

- ・かみコップタワーをつくる時、みんなできもちをあわせてちからをあわせたからできたとおもいます。
- ・みんなに「せーの」ってこえをかけたから。
- ・3かいせいこうしてこのチームはすごいとおもいました。
- ・さいごのほうで、みんなでちからをあわせてつんだらできた。
- ・みんなときれいなかみコップタワーができてうれしいなとおもいました。
- ・みんなでちからをあわせてかんせいしてよかったです。かみコップタワーを、ちからをあわせてつくったのがとてもたのしかったので「またつくりたいな。」とおもいました。

(2) 指導した教師の感想

・子どもたちが楽しそうに活動していた。授業が盛り上がった。

・さりげなく活動を促進できる子どもや、的確に指示ができる子どもなど、どの子どもがグループ活動で力を発揮するのかをみることができた。

・運動会に向けて協力するとはどうすることかを伝える機会になった。

・子どもたちが授業中に「せーの。」とか「○○さん引っ張って。」という声をだせばうまく行くと考えていた子ども中にはいた。

・グループで協力して取り組むということがあまりなかった。今回の「かみコップタワーを作ろう」を通して、一つの経験ができた。このような経験を積み重ねていきたいと考えた。

・児童の意外な面、新しい一面を発見できた。おとなしい子が他の子をリードしていたり、自己中心的なところがある子が友達のことを考えていたり、児童理解が深まり本当によかったと思う。

・身近な材料を使ってできるので費用がかからず、準備に時間がかからないので手軽にできると思った。

(3) 実験授業実施後の考察

授業後の子どもたちの感想から、力を合わせてタワーをつくることの喜びや「せーの」と声をかけて気持ちを合わせるとよいことなど、自分の体験から得られた素直な気づきを読み取ることができた。このような「協力」の関係が成立するために子どもたちは、相手への注目、動きのイメージをつかみコミュニケーションをとる、動きを合わせる、などのスキルを積極的に使っていると考えられる。葛藤場面を「話をしないでコップタワーをつくらう。」としたことで、グループのメンバーに注目し、目と目で合図をして行動をそろえるといったスキルに焦点化することができたと考えられる。

教師の側には、「協力」の姿を児童に具体的に示すことができたこと、教科の指導の中からは見出しにくかった児童の姿を「協力」する活動を通して理解することができたことなどの気づきがあった。

2.4. 小学校3年生の実験授業と考察

2012年10月30日と11月8日に小学校3年生の2つの学級でそれぞれ実験授業を実施した。葛藤場面の設定では、状況の伝わりにくさを体験できるように工夫した(表2)。

表2 実験授業の流れ(小学校3年生)

過程	学習内容
導入 10分	○協力しよう。 ・協力したことがありますか？ ・協力ってどういうこと？ ■協力してコップタワーをつくる方法を知る

展開 25分	① 協力してコップタワーをつくらう ・どうしたら協力できたかを考えながら作ろう ・うまく協力する方法がたくさんあることに気づこう ③ 葛藤場面の設定 「役割を決めてコップタワーをつくらう」 (役割) アイマスクをする。 話をしないようにマスクをする。 すべりやすい軍手でもつ。 ・1回目と2回目のコップタワーのつくり方はどのようにちがってくるだろうか。どのような点に気をつけて行動をすればよいだろうか。 ④ 役割を交代してコップタワーをつくらう ・うまく協力する方法をみつけたら積極的に試してみよう。
振り返り	○協力について感じたことや気づいたことを話し合おう

(1) 3年生児童の振り返りシートより

3年1組および2組児童78名中、欠席児童1名を除いて76名(98%)の児童が授業を「面白かった」と答えた。グループの「他の児童の動きに注目した。」と回答した児童も76名(98%)であった。また、「協力」ができたと考えた児童は72名(95%)である。「協力」ができなかったと回答した児童のうち4名は、授業時間の中で紙コップタワーを一度も完成させることができなかったグループの4名であった。

振り返りシートの記述は文字数が多く、本時の活動を通じて協力について思考が深まった様子を受け取ることができた。最も多いのは、「かけ声をかける。息を合わせる」であったが、1年生の振り返りシートには無い記述も多かった。



図1 授業風景

・めかくしをしている人は見えないから、見える人がその人がうまく理解できるようにアドバイスすることも大事です。
・しっばいしてもあきらめない「どんまい」「つぎからがんばろう」など声をかける。

表3 実験授業の流れ（小学校5年生：例1）

過程	学習内容
導入 5分	○協力しよう。 ・協力したことがありますか？ ・協力ってどういうこと？ ■協力してコップタワーをつくる方法を知る (紙コップの数を10個にする)
展開 30分	① 協力してコップタワーをつくろう ・どうしたら協力できたかを考えながら作ろう ・うまく協力する方法がたくさんあることに気づこう ② 1回目のコップタワーをつくろう ・コップタワーができるまでの時間をはかり、記録する。 ・どうしたらかかった時間を短縮できるかどうかについてグループで話し合いをする。 ③ 2回目のコップタワーをつくろう ・かかった時間についてグループごとに評価をする。もっと時間を短縮できるのか、できないのかを話し合う。 ・うまく協力する方法がないかどうかを話し合う。協力する方法をみつけたら時間を短縮させるために積極的に試してみることを提案する。 ④ 最後にコップタワーを完成するまでの時間を測る。 ・最もコップタワーをつくる時間を短縮できたチームの協力の仕方について学級全体で考える。
振り返り 10分	○協力について学んだことや気づいたことについて各自、振り返りシートに記入する。

(留意点)時間を短縮できないグループもあることが考えられる。時間を短縮できなかった訳を考えられるだけあげるようにして、次の授業につなげることができるようにする。

表4 実験授業の流れ（小学校5年生：例2）

過程	学習内容
導入 5分	○協力しよう。 前時に気づいた「協力」のスキルを使って、「協力」しよう。
展開 30分	① 役割を決めてコップタワーをつくろう (役割) アイマスクをする。1名 話をしないようにマスクをする。2名 アイマスクもせず話をしてもよい。1名 ・ここではリーダーをだれにするかという点について指示を出さない。 ② 役割を交代してコップタワーをつくろう

	<ul style="list-style-type: none"> ・短縮できなかった時間についてグループごとに話し合い解決方法を考える。 ・うまく協力する方法がほかにないかどうかを話し合う。協力する方法をみつけたら時間を短縮させるために積極的に試してみることを提案する。 ・アイマスクをする人、マスクをする人を交代してタワーをつくりタイムを計る。
振り返り 10分	○協力について学んだことや気づいたことについて各自、振り返りシートに記入する。

(留意点)アイマスクもマスクもしない児童がグループにひとりだけいる。この児童がメンバーに伝える力を効果的に使うことによりリーダー的な役割を採らなくてはならなくなる。課題を達成するためには言葉だけでなく、身振り手振りなど非言語の手段を効果的に使うにはどうするかをグループで話し合わせたい。

3. 考察

本研究では、低学年、中学年を対象に「協力」を具体的に学ぶことができる学級指導を実施し、子どもたちが「協力」についてどのように考えたか。また、教師が授業を通じて何を考えたかを検討したものである。

高学年の授業は実施することができなかったが、低学年と中学年の実験授業を実施した結果から改良を加え、45分授業×2回の授業の流れを提示した。

「協力」の実験授業を通じて得られた結果は次の通りである。

3.1. 「協力」するための実践的なスキルを獲得する

「協力」する体験に関して「面白い」と感じる児童が1年生で85%以上、3年生は98%であった。特に3年生が「協力」の実験授業での体験を楽しいものと感じていた。1年生が3年生より楽しさを感じられなかったのは手指の巧緻性など微細運動の困難さが3年生よりも大きかったことと、自己完結的には目的が達成されないという課題(4人で糸を引かなければ紙コップをもちあげられない)に対する困難さがあったためではないかと考えられる。

困難さがある中でも1年生は「せーの」というかけ声を使ってメンバーの動きを一瞬に集中させたり、気持ちをあわせたりすることができたと振り返っている。葛藤場面で声を出さなくても紙コップタワーをつくるこ

とができたのは、メンバーの動きに注目し、目と目で合図をして行動をそろえることができたからである。3年生になると「協力」するためのスキルが豊かになっている。失敗したときやパニックになったときの対策、相手の状況を把握してアドバイスをする、相手の良さに気づいて表現するなどのスキルが使えるようになっていく。5年生は実践をすることができなかったが、3年生の児童の姿から「リーダー的な児童がアイマスクをすることになってしまったグループでは、だれが次のリーダーになるかを瞬時に決めてタワーを作り上げていた。」との様子を見ることができたことから、リーダーとフォロアーの役割について考え目的に沿った役割の決め方や交代したときの対処などに関連する「協力」のスキルが学習できるのではないかと考える。

学級の土台作りにつながる今回のような授業は、日々実施することによって学級の風土を方向付けるのに有効であるといえる。

3.2. 担任が児童相互の関係を発見できる。

担任が、日頃の授業の様子からは見取ることが難しい児童の姿、特にグループ活動の中での個々の児童の発信のプロセスに気づくことができた。一般に学級活動の授業は担任が実施するが、自らの学級経営を俯瞰的に観察するために担任でないものが学級活動の授業をする機会があってもよいのではないかと考えられる。授業者としては、通級指導教室の教諭、スクールカウンセラー、生活指導の専門教諭などが考えられる。通級指導教室に在籍している児童の学級への受け入れを促す目的や学級の荒れへの対応など目的に応じて担任以外のものが学級指導の授業をすることが学級担任の児童理解を豊かにすると考えられた。今回の授業を参観して学級担任が言葉にした児童に関する新しい側面は、明日の指導や教授行動に変化を生み出す機会になると考える。

3.3. 「協力」に焦点化して振り返る

構造化されたゲームを用いているため、働きかけを行うタイミングや何をすれば目標達成に貢献する行動になるのか理解しやすい。したがって、グループによる目標達成の在り方を示すモデルになる。3年生の児童の感想の中に「いままでもいろいろ理科や算数で協力してきた価値があったなあ」とあったように、「協力」の体験を振り返る過程を通じて今までの教科の学習や学校行事の経験に価値を見出すことができた。教科の授業や学校行事で何を学んでいるのかを振り返る時間をもつことは「協力」の質を向上させることにつながると考えられる。教科の授業や学校行事に「協力」が位置づけられていることの意味を学級で共有するためにも有効な授業である考える。

以上のことから、本研究で実施した「協力」の学級指導は、子どもたちに「協力」をしたいという気持ちや「協力」に関する分かりやすいモデルを提示する。教師は構造化された授業から児童の新たな姿を発見することができ、「協力」に関する児童のスキルやつながり方の特徴を理解し、細やかな指導につなげるきっかけをみつけることができることが分かった。

4. 課題

4.1. 効果判断についての検討

本研究はソーシャルスキルトレーニングの技法を通常の学級に応用することを試みたものである。ソーシャルスキルトレーニングは本来、問題解決を目的とする指導・治療技法であることから効果判断の測定を厳密に実施する。そのための手続き、行動観察、自己評定尺度などが開発されているが、本研究ではこれらの効果判断の指標を使わなかった。学級担任として授業を進めると同時に、学級集団の中で個人に対して実施されている方法を用いて効果の測定をするのは不可能であり、授業を開発することができないと考えたからである。通常の学級において担任が厳密に児童に対する効果の測定を実施するには、効果測定の専門家や研究者との連携が必要ではないかと考える。

4.2. 通常の学級にできること

特別支援教育の分野で通常の学級にできることは限られている。いつでもだれがきても気持ちよく学級に入れるようバリアフリーの学級になるように整えておくことだけである。本研究のように、いつでもだれがきても気持ちよく学級にはいれるようにするために学級の風土を整える知恵を特別支援教育の分野から学ぶことが多い。学級に見えない敷居や壁ができてしまっていないかを厳しく点検するために特別支援教育の分野から知恵を拝借して学級の様子や授業を省察してみることが大切であると考えられる。

4.3. 「協力」の学級指導の授業を振り返って

授業をつくるに当たって、教師が「協力」の説明をしたり価値を押しついたりするのではなく、子どもたちが「協力」そのものを実感できる授業を作りたいと考えた。「協力」を指導することで教師が教科の授業をしやすくなるといった結果を期待するわけではなかった。「協力」の姿を学級で共通の枠組みとすることで子どもたちの学ぶ姿勢に変化をもたらすことができるのではないかと期待した。学級の風土として「協力」が成立するようになれば、教科の授業だけでは無くあらゆる状況から児

童相互に学ぶ姿勢が生じるようになるのではないか。また、人間関係の中で思いがけなく生じた学びに対して互いに「ありがとう。」と言い合える関係が築けるような気がする。

学級担任は子どもたちが建設的に協力し合う方法を当然知っているはずだと決めつけず、特別支援教育の知見なども参考にしながら児童が共に学び合うための技能をひとつひとつ取り上げて積み上げることが大切である。さらに、建設的に協力し合う方法を技能に終わらせるのではなく、教科の授業や学校行事等で発揮できるように教育活動全体を総合的に見直すことが必要とされているのではないかと考える。

¹ 茨城県教育委員会の道徳教育のページ：小学校中学年で友だちを理解し協力し合って楽しい学級を作ろうとする心情を育てる指導事例が紹介されている。大なわ大会でクラスが一つにまとまり、助け合うことのすばらしさを実感できる自作資料を使った指導事例である。

http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/gakkou/shochu/kokoro/sinheart/moral/h20/03/h20_03.html（最終閲覧日：2013年1月27日）

² 藤木太郎（2008）「協力的行動を取らせる態度を育てる道徳教育の開発ー社会的ジレンマを扱った授業ー」授業実践開発研究、第1巻、pp.81-89

³ 佐藤正二・佐藤容子編（2006）『学校における SST 実践ガイド 子どもの対人スキル指導』、金剛出版

⁴ NPO 法人 日本こどものための委員会（2006）『キレイな子どもを育てるセカンドステップ』文修堂印刷

⁵ コミュニケーション円滑に 教室で学ぶ社会生活（産経新聞 2007年05月8日14時19分）

<http://www.kosmo-net.co.jp/newsfile.htm>（最終閲覧日：2013年1月27日）

東京都品川区が2006年度に必須科した「市民科」にも「ソーシャルスキル教育」が取り入れられた例などが紹介されている。

⁶ 日本学校 GWT 研究会編著（2003）『学校グループワーク・トレーニング3 友だちっていいな 自分っていいな』遊戯社

⁷ 滝井章（2001）『クラスを育てる算数授業』東洋館出版社

⁸ 「協力」するための技能については、ソーシャルスキル教育に関する以下の書籍を参考に作成しました。

岡田智ほか編（2009）『特別支援教育ソーシャルスキル実践集 支援の具体策 93』、明治図書

小林正幸・相川充編（2011、初版第29刷発行）『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる』図書文化社

⁹ 西川純（2012）『学び合い』の手引き書

<http://dl.dropbox.com/u/352241/manabiai-data/net-book/tebiki.pdf>（最終閲覧日：2013年1月27日）

参考文献

藤川大祐（2008）『授業づくり』とは何かー研究としての授業実践研究に関する考察ー、授業実践開発研究、第1巻、pp.5-11

謝辞

本論の執筆、授業の開発と実践に際して、東京都板橋区立桜川小学校校長樋口晋先生、1年生、3年生、5年生の先生方のご厚意には感謝の表しがありません。また、査読会でご意見・ご示唆をいただいた藤川大祐先生、塩田真吾先生、千葉大学藤川研究室の皆様、NPO法人企業教育研究所（ACE）の皆様、このような貴重な学びの機会をいただき心から感謝いたします。